

## 春のガン・ハクチョウ類の渡り行動

### ー風力発電建設予定地である津軽十三湖の事例ー

○柏木敦士・○高橋雅雄・笠原里恵・東信行（弘前大学農学生命科学部）

風力発電施設の設置が鳥類に大きな影響を与えうることは一般的に知られており、ガンカモ類も例外ではない。しかしながら、具体的な影響を定量的に評価するには、①施設（予定地）周辺の生息個体数や環境利用の状況や季節変動等を事業前に把握し、②事業後にそれらの変化を検証することが必要となる。

青森県西部の津軽半島に位置する十三湖および周辺の農耕地は、ガン・ハクチョウ類の春の渡りにおける大規模な中継地である一方で、風力発電施設の建設が予定されており、その影響が懸念されている。そのため本研究では、事業前の状況把握を目的に、十三湖を利用するガン類（主にマガンとオオヒシクイ）とハクチョウ類（コハクチョウとオオハクチョウ）の渡去行動に関する野外調査を2013年～2016年に実施した。2013年と2014年は3月中旬から4月下旬、2015年と2016年は2月中旬から4月中旬に、ほぼ毎日、日の出前から日没後まで定点観察を行い、ガン類とハクチョウ類の渡去行動について、種類と個体数、群れの飛行高度、渡去の方角等を記録した。

調査の結果、少なく見積もっても約3万～6万羽のガン類、約3500～9000羽のハクチョウ類が十三湖を利用することが明らかとなった。渡去数は調査日によって大きく異なり、そのピーク時期は種類や調査年によって大きく異なっていた。ガン類では、2013年と2014年は3月下旬にピークが1度見られたが、2015年は3月上旬と中旬に計2度見られた。ハクチョウ類では2013年と2014年には3月下旬もしくは4月上旬にピークが見られたが、2015年は3月中旬にピークが見られた。このような日間および年間の渡去行動の違いは気象条件（風況や気温など）によるものと考えられる。発表では、十三湖を利用するガン類とハクチョウ類の渡去時期および渡去数に、気象条件がどのように影響していたかについて紹介する。さらに、秋田県小友沼、北海道宮島沼、クッチャロ湖、大沼（稚内市）の4地域と渡去時期を比較し、渡り行動の年間差に関する考察を行いたい。

